

研究ノート

岩手県野田村の弥生小型壺と北海道江別市の続縄文小型壺

2.1 はじめに

筆者は 2016 ～ 17 年に公益財団法人岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター（以下、岩埋文）に所属し、2016 年に岩手県野田村上代川遺跡（岩手埋文 2020）の発掘調査に携わった。遺跡は中世の製鉄遺構が主体だが、弥生中期～後期を主に弥生土器も出土した（同 p.168-173）。その中に小型壺（図 2 同 p.200-59）があった。そして、これに類した壺が北海道江別市旧豊平川河畔遺跡（図 3 江別市 1983 p.18-6, 石川 2005 p.19-2）にあった。岩手県野田村と江別市の間に位置する道南で活動する南北海道考古学情報交換会会誌に紹介し、皆様から御教示いただきたい。

2.2 野田村上代川遺跡の小型壺

竪穴住居 SI06 埋土出土。この埋土は弥生中期後半・川岸場式を主として後期・赤穴式までの土器が出土する。小型壺は頸部に穿孔が一か所ある。その頸部には横走沈線が巡る。無紋地に二本一組の沈線で器表面のほぼ全面に施文する。肩と底部際には鋸歯状文が巡る。底部は上げ底気味、器壁厚さは比較的一定で、口唇断面形状は

すぼまる。胴部は弧状の沈線が方形区画内に収まった文様が横に連続する構成である。時期は、遺跡報告書の分類記号（岩埋文 2020p.167）で V 群 3 類 A（本文:同 p.162-163, 図:同 p.169*¹）である。V 群 3 類とは、弥生中葉は川岸場式の頃、A は恵山式や田舎館式といった、より北からの影響がある土器群を指す。大きさは、口径約 4.8cm、底径 5.0cm、高さ 12.0cm で、頸部径は 4.6cm、胴部径は 9.2cm である。

2.3 江別市旧豊平川河畔遺跡の小型壺

遺跡は旧豊平川（世田豊平川）を見下ろす台地の縁にあり、江別チャシも同じ台地上にある。壺は墓 18 から出土した（図 3）。図 3a は再実測と拓本（石川 2005）、図 3b は当初の報告図（江別市 1983）である。図 2 で示したものと同様、頸部の一か所に穿孔があり、こちらは二つの穴で一組となる。頸部には横走沈線が巡るが穿孔部分より上、口唇際は無紋となる。縄文地に三本一組の沈線で施文し、肩部に鋸歯状文が巡る。底部は上げ底気味で、器壁厚さはほぼ一

*1 掲載表（岩埋文 2020 p.371）の V 群 4 類は誤り

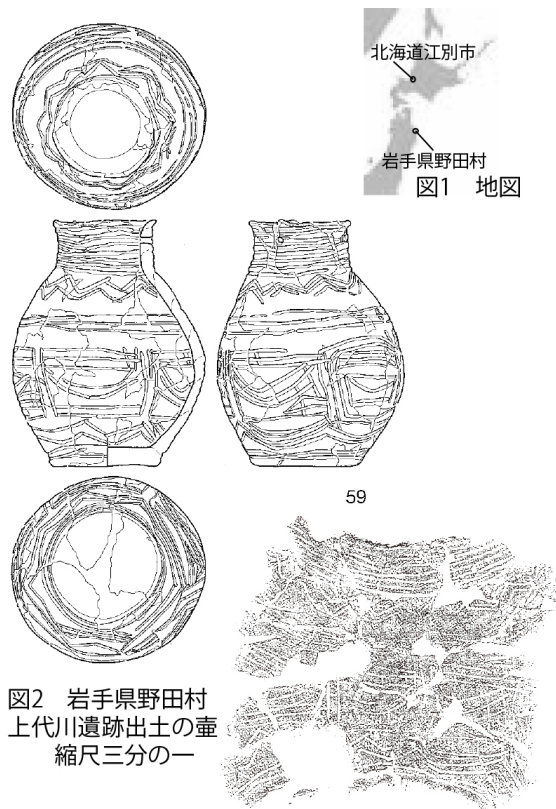


図2 岩手県野田村
上代川遺跡出土の壺
縮尺三分の一

定、口唇断面形状はすぼまる。胴部は弧線文が横方向へ並ぶ。うろこ状に近いが一部は不規則である。胴部下・底部際は沈線文が無く縄文のみである。大きさは口径4.2cm、底径4.6cm、高さ13.6cmで、頸部径は3.8cm、胴部最大径は9.8cmである。

上代川遺跡出土のものと比較すると、高さに比べて横幅が若干狭く全体的に細めである。また無紋に対して縄文地紋である。無紋帯が頸部から口唇にかけて巡り、底部際も地紋のみである。器壁の厚みは一定で、上げ底気味の底部と口唇断面の形状に類似点がある。他にも、二本と三本の違いはあるが複数本の沈線で施文する点と、頸部に一単位の穿孔があることが挙げられる。

2.4 壺の時期

墓18出土土器の時期を考察する。豊平川河畔遺跡墓18出土土器(図4-1～3)は、出土地

点から南西に約400m離れた元江別1遺跡墓19出土土器に似る。墓19出土14個体の復元土器には二本ないし三本一組の沈線施文を持つ個体が目立つ(大泰司2021 p.11)。

豊平川河畔遺跡墓18(図4)と元江別1遺跡墓19(図5)の出土土器群を比較すると、墓18図4-1は縄文地紋で胴部最大径部分の横走沈線が、墓19図5-3・13と似る。小型壺図4-2は図3と同一で、一単位の穿孔と胴部文様構成、口唇際の無紋帯と底部際は縄文地紋のみで沈線文が無い点が図5-6・10に似る。図4-3は頸部に幅広い無紋帯があり、その上下に横走沈線が巡り、帯の下に刺突列が横方向に並ぶ点、そして、口唇部に縦方向の短沈線が横方向に連続して並ぶ点、そして器形が図5-11と似ている。よって両群は時期的に近いと考える。両群を様似町冬島遺跡出土土器の検討(大泰司2021 p.15)で作成した表1において、網掛けで示した時期に位置すると考えたい。その結果、川岸場式並行の可能性が高く、上代川遺跡と豊平川河畔遺跡の小型壺も同様に近い時期の土器と考えた。上代川遺跡出土弥生土器は川岸場式の頃をV群3類として、そのうち文様要素から、田舎館式ひいては恵山式の影響が考えられるものをAとしたことは2.2項で触れたが、まともには三つあり、残り二つのうちBは北上川沿いの土器型式・川岸場式、Cは馬淵川・新井田川流域・八戸市域ないし野田村の在地的な特徴を持つ土器(岩埋文2020 p.167)である。

Aとした今回の小型壺が江別市の小型壺と「類同」とまではいかないが、類似点があったことを記した。今後も検討を続けたい。

江別市元江別1遺跡墓19出土土器と、様似町冬島遺跡出土土器に類似点があったという内容の文章(大泰司2021 p.10-11)を今回、引用した。この様似町と野田村とは人の行き来が盛んで、1998年に友好町村を締結した。この人々の

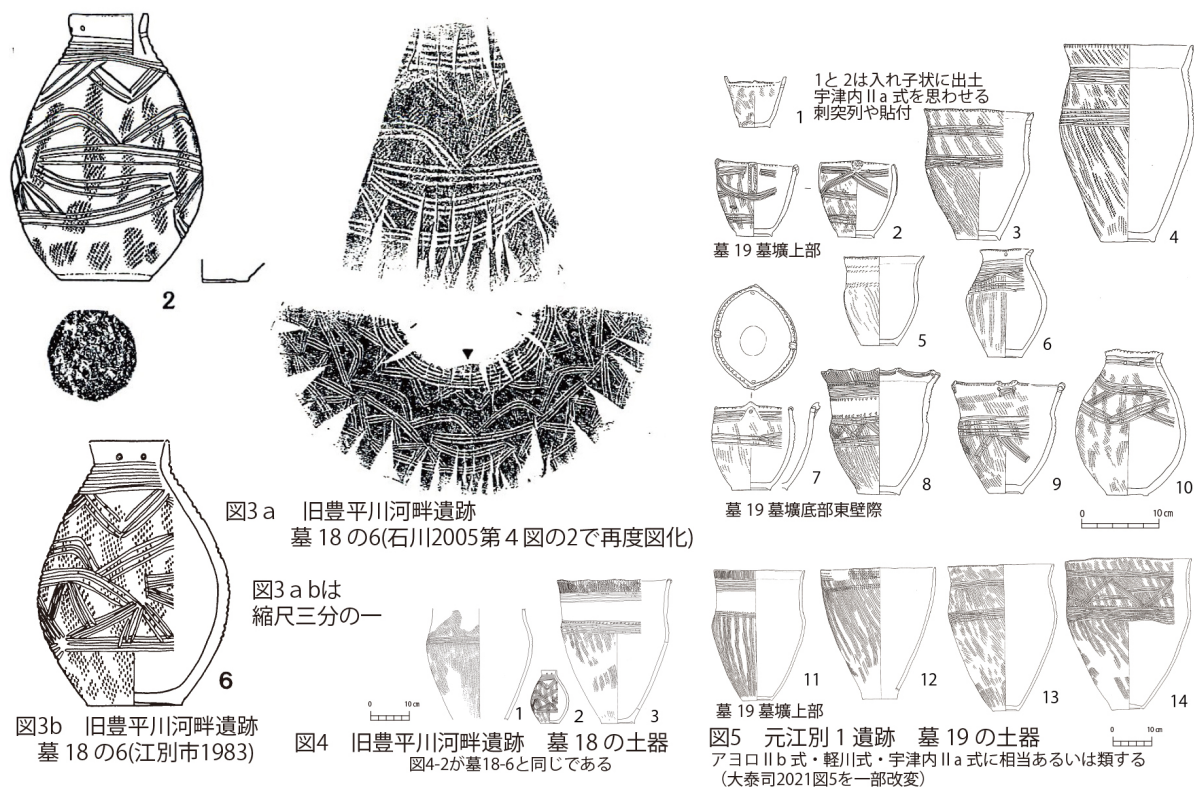


表1 時期考察表(大泰司2021冬島遺跡関連編年表を援用)

大沼忠春の時間軸(大沼忠春2004から抜粋)		道南(大沼忠春2004から抜粋)	南有珠6遺跡 報告書(伊達市1983)での対応	道東(大沼忠春2004から抜粋)	矢吹俊男 (1996)	能芳室(1991)	道東(大沼忠春2004から抜粋)	石川(2005)から抜粋	青森県史 (2005) 時期
縄文晩期	大沼A式	縄文晩期							
前3~2世紀	砂沢式 二枚橋式	続縄文 前期	南有珠6遺跡VII・VIII	I期	氷川神社 油断 大狩部式	大狩部式	緑ヶ丘1式新 下田ノ沢1式新	前	砂沢式
弥生	宇津内II式 印巻陸式	文 前期	南有珠6遺跡VI期	II期	江別太田6 江別太田5・軽川式 東歌別式	東歌別式1~2期(仮称A期)	中ノ島A 築港第一 中ノ島 下田ノ沢1式古 下田ノ沢1式新	中	五所式/二枚橋式
1世紀	荒巻式 赤穴式	期 II期	南有珠6遺跡V期 南有珠6遺跡IV期	III期	後北A式	東歌別式3~4期(仮称B期) 後北A式	宇津内IIa式古 宇津内IIa式新 宇津内IIb式古 宇津内IIb式新	後	宇津内IIa式古 宇津内IIa式新 宇津内IIb式古 宇津内IIb式新

今回紹介した小型壺二個体の推定時期

動きは、流れの強い津軽暖流を避けた結果なのであろうか。

上代川遺跡では北田勲氏の采配の元、作業に没頭できた。土器整理は石川日出志先生のお力で乗り切ることができた。江別市では佐藤一志氏に便宜を図っていただいた。そして、佐藤由紀男先生、大坂拓氏から御助言をいただいた。記して謝意を表したい。

参考文献

- 石川日出志 2005 『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』
- 公益財団法人岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター 2020 『上代川遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興

事業団埋蔵文化財調査報告書第713集

- 江別市教育委員会 1983 『町村農場1・七丁目沢7・旧豊平川河畔—江別チャシー・後藤・大麻3』 江別市文化財調査報告書XVII
- 江別市教育委員会 1981 『元江別遺跡群 後藤遺跡 旧豊平川河畔遺跡 元江別1遺跡 元江別2遺跡 元江別5遺跡 元江別10遺跡 元江別11遺跡』 江別市文化財調査報告書XIII
- 大泰司統 2021 『冬島遺跡の特徴的な土器』 『様似郷土館紀要 3号』

大泰司 統 (公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター)